
冥王？これはパシリの間違いだろ？

怪盗レトルト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

冥王？コレはパシリの間違いだろ？

【Nコード】

N17410

【作者名】

怪盗レトルト

【あらすじ】

死んで冥界に來た俺はいきなり『冥王になれ』と言われてなんだ
かんだで引き受けて漫画の世界に來たが…
…どこが強くなったんだ？
神どころか狼に食われそうになるなんて……………

クソッ、このまま終わってたまるかよ。

一話 ポックリのち冥王（前書き）

処女作〜なのです！

目指せ完結、目標五十話、

執筆に慣れるまで時間がかかりそうですが、頑張って行きます

アドバイス大歓迎です。

作者が壊れるか、ネタが尽きるか……

完結するかなコレ……

一話 ポツクリのち冥王

あゝあ、死ぬよコリヤ。

何でF15戦闘機がオープンテラスに突っ込んで来んだよ？車じゃなくて音速の飛行機って運無さすぎ。

俺、燈城煉夜は人生最後の時を迎えていた。

なんだかなあ。引きこもりやめてから一週間後にデッドエンド。ナニコレ……。

彼は、カフェのオープンテラスで自分を引きこもり生活から救ってくれた幼なじみと待ち合わせしていただけだ。まだここに彼女がいないのは助かった。

そっか、これ世界貿易センタービルの人たちと似た立場か。店に車が出たのと大して変わんねえな。

ふう、残り1.5秒の人生で今までが一番頭の回転が良くな……はい、死んだ。

彼は意識を閉じた

で、死後の世界に来た。空は真っ赤で大地は真っ黒草木の代わりに骨が転がる終つちまつてる世界だな。そこにいる俺に偉そうに胸を張る金髪の姫様スタイルの女性がいる。しかも、

「オヌシ、冥王になれ。」

だとさ。……………テンプレ？

「あゝ俺の名前は燈城煉夜^{とうじょうれんや}。アンタ誰？この状況を詳しく説明してくれ。」

「うむ、慌てることのない精神、自分から名乗る礼儀、素早い状況確認。これはなかなか上物じゃな。」

俺の品定めを始める金髪の女性は……………

「まさかロザリンド？」

『魔界戦記デイスガイア2』のヒロイン、魔王ゼノンの娘で世間知

らずの箱入り娘、転生した最強の魔王、

…ロザリンドその人だ。

「嗚呼、すまんスマン、自己紹介を忘れておったわ。妾の名はヘル。冥界の女王を務めておる。妾の姿は半分ほど腐敗しとるから、オヌシの記憶から気に入ったこの姿になっておる。だから妾のことはロザリーと呼ぶがよい。むしろそう呼べ、これは命令である。」

確かに、喋り方がぴったりと当てはまる。冥界の女王へ「ロザリーじゃ。」……ロザリーにそっくりだ。

「簡単に言つと漫画の世界に転生してもらいヴァルキリーの真似事をして貰つ。」

「慎んで遠ry」異議は認めん。決定事項じゃ。「……けど理由はなんだ？」

「冥界の労働力たる死者…亡者とも言つが…その数が足りないんじや。」

ロザリーと家来たちの食事や食糧の生産は冥界に来た亡者の仕事らしい。その亡者が少なくてろくな生活をしていないとか。

「実は冥界も複数在ってな。ギリシャのハデスやエジプトのオシリ

スなんかと死者の魂の奪い合いになっておる。」

死者は労働力となるのでより多くの死者を求めて戦争にもなるそう
だ。

「じゃが戦いで死んだ者は父上の義兄のオーディン伯父上のヴァルハラに逝くからな。ここには戦いを知ぬ人間ばかりが集まってしま
う。当然戦争には負け続け今は百人いるか……切実かつ深刻な
問題だよな。」

「このままではラグナロクを回避したのに妾の冥界が消えるであろ
う。それは妾の面子が潰れるからイヤじゃ。そこでオアシがマンガ
の世界で殺戮を行ってこの冥界に送ればこんな問題はすぐに解決じ
ゃ！オアシも原作の世界を体験できる。さあ、お互いにとってお
いしいこの話、喜んで受けるがよい。」

「俺は普通に生き返るほうを希望する。そんな冥王とは名ばかりの
半永久パシリは御免だね。」

ハハハ、絶対に引き受けてたまるか。さらつとヤバイ単語が聞こえ
たし、何より俺はまともな人生を送り直したいんだ。

「だいたい神様同士の問題を人間に協力求めてる時点で終わって
るじゃん。それじゃあアンタらの力もたかが知れてる。今にも潰れそ
うな会社で誰が働くと？」

すると……………

「な、ならば妾はオヌシを生き返らせねぬ。これで生き返ることは出来ず引き受けるしかあるまい。」

……人の話を聞いていたのだろうかこのバカ女は。

自分からこの冥界はもうすぐ消えると言ったのだ。我慢比べはこっちが有利。

「この冥界が減ぶまで我慢してやろうか？困ってるのにちゃんとした頼み方をしない奴らの話は引き受けるもんか。」

少しでも要求を通すためにも自分の立場を上、相手から頼み込ませるべきだ。

「ちゃんと、そっちから、『御願います。』と頼め。もちろんこちらの要求もいくつか呑んで貰うがな。」ホント、言葉には気を付けるべきだよな。上から目線で自分の不始末の処理を押し付けられたらさ、ムカつくよホントに。

「まず《ちゃんと頭をさげて頼む》ことと、依頼を達成できる戦闘能力、あと俺の立場はアンタの上であり俺の自由を保証すること。これが条件。さあ、どうかな？」

この条件に少しでもケチをつけやがったら……クッククク……

「どうか御願います。私と冥界を救ってください。」

それは見事に土下座で頼み込まれてしまい、驚いた俺は反射的に頭を縦に振ってしまった……。

……アレ？

「ウム、多少揉めたがこれで契約成立じゃな。オヌシの魂、中々に捻れておる。面白いから妾のとおきをくれてやろう。」

しまった、調子にのって油断した。ロザリーの奴満面の笑み浮かべやがって……。チクシヨウ……。

「そうと決まれば早速送り出すとするかの。「ちょ、能力をよく」うるさい。既にロキお父様がオヌシの体を改造……。もとい強化済みじゃ。加えて妾のとおきのおきのやつを授けた以上神様も倒せる!!……。(多分、恐らく、どれだけかかるかは分からんが……。)はずじゃ。」

「改造っていつの間に!?!俺が行くのホントに決定事項かよ!?!つ

か多分とかいつかとか言いつつ神様も倒せるって後のこと考えるよ！
「！！」
「うるさいのう。強いんだから別にいいではないか。もうすぐ飛ぶから気を付けてな」

反論する前に俺の足元の地面が飛び上がり……

「それはどうよー！【舌を嚙んだ】」

俺は音速で翔んでいった。

一話 ポックリのち冥王（後書き）

説明文が多すぎる…

「二話 ナニコレ？俺の幸運はどうなってんだよ？」

煉夜 side

「ングヴウウー！？」

冥界の旅立ちで舌を噛んだ俺は微妙な悲鳴と共に飛んでいく。

何故か速度はマツハ2にまで上昇している。かれこれ15分経過、天井はまだ見えない。

「（どこまで行くだよ……………。」

確か冥界は人間界の下に位置していたから俺は地面から顔を出すかもしれない。

「こうして飛ばされるまま何の変化もないのはつらいな……………。気が狂う。」

とりあえずもう寝よう。

現実逃避するのが一番楽だ。神すら殺せるほどなら死にやしないだろ。

この思考時間2・3秒、実行に5秒かかった。

……泣ける。この状況は泣くしかない!!

今の俺は地面から生えたみしるし……生首にしか見えない。夜で人がいないのが救いかもしれない。

「まさかホントに地面から出てくるとは……ロザリーの奴ナニがしたいのかさっぱりわかんねえ。これじゃ仕事出来ないぞ?」

あのあと眠りかけた時に天井らしき物に突貫していた。オチも予想出来ていたが、痛かった。それしか分からなかった。

音速を超える速度の体と壁がぶつかれば、人の身体なんて跡形もなく吹き飛ぶよな?強化済みでも頭から突っ込んで首痛めただけとか……さすがは神をも殺せる身体だ。

しかし、状況は悪い。

「今動いて冥界に逆戻りはやだな。」
「なんとか地上までは来たものの、すっかりはまって生首状態。それでいて地面に埋まっている足は宙ぶらりん。下手に暴れると冥界まで真つ逆さまに落ちるだろう。」

「ロザリー……普通に送り出せなかったのか？」

足が地に着かないこの状態はストレスが溜まる。しばらくそうしている……。

狼の群れに囲まれた。……Oh!?(。・。;)」

マズイ?、肉食獣だ。この状態じゃ首食いちぎられてデットエンド!!になっちまう。そんなのは勘弁だ。こつなったらカツコ悪いが手段は一つ!!

「誰かーっ!!助けてくれー狼に喰われるー!!」

他力本願!!首だけじゃ声出すしかないだろ。でも夜だから人がいねーし……。

「マ、マズイ?!ウワァー!!シヌシヌシヌ!!ヘルプミー!!

ヤバイヤバイヤバイ！！！！ホントダレデモイイカラタスケター！
」

「ご都合主義じゃないのか！？叫んでも助けは現れず、狼が近づいてくる。恐怖に耐えられずに目を閉じた。

も、もうダメだ……

狼の息づかいを感じる。

嗚呼、ガブツと食われるのか……。そして……。

噛みゅ「ペロペロ」……ハイ？『ペロペロ』？舐められてる？噛み付くんじゃなくて？

「フウ、助かつゅ「ペロペロ」…喰われなくて良かつゅ「ペロペロペロ」…ちょ、ヤメ」「ペロペロペロペロ」ギャー！！！！！！」

この後、自力で穴から這い出てくるまで二時間、狼たちから逃げ切るのに四時間もかかり、気付けば朝日が上っていた。

「……もうダメだ……少し寝よう……zzzz。」

茂みの影で眠りについた。人間、どこでも眠れることがわかって嬉しく………はないな……。

翌日

狼に舐め回されて臭うので川で水浴びをした。

俺の身体や服はV.P【咎を背負いし者】のウィルフレドに似た十歳の体になっている。この歳で白髪はなんかへこんだ。

ポケットに入ってたロザリーからのメモにそう書かれていた。ちなみに他にも色々書いてあったが狼にボロボロにされてしまい、

【身体能力上げといた】

【本名は使っな】

【原作知識没収】

しか読み取れなかった。

武器も魔法も知識も無いので頼りは己の肉体のみ。だがその肉体も

.....

グウウウ〜

空腹の前に屈伏した。胃が食べ物を、エネルギー源を求めて唸っている。

「昨日の四時間マラソンキツかったな……。」

森にはキノコがあったが手は出していない。マオに出るスーパーキノコと毒コしかないし。テレビで見たが大きくなる赤キノコの方も有毒らしい。リオってアイアンストマック？……それよりも……

「……食べ物……肉……魚……焼き鳥……。俺はゾンビのように足を引き摺りながら進んでいる。そんな俺の気迫に一歩進めることに鳥が飛び去り、イノシシも逃げ出した。食べ物が……逃げていく……」

こうしてさ迷っていたがしばらくして人の声がした。どうやらこの先で騒ぎが起きたようだ。人がいるなら飯にありつける可能性が高い。今すぐ人混みに向かっていこう。

「オーイ、何か食い……？」

何人かの大人が少女を囲んでいた。どちらも日本人じゃないが何故か言葉はわかる。ロザリーの改造の力だろうか？

「遂に捕らえたぞ、覚悟しろ魔女め！！」

大人の1人が少女の髪を掴んで宙吊りにしている。

少女は十歳程の綺麗な金髪を膝まで届くほどのばしていたが服装はボロボロだ。

恐らくあの大人たちに襲われたのだろう。

「へへ、少女相手によくもそこまでしたもんだな……変態か？……ま、力を試すにはちょうどいい。飯が不味くなる前にころs……処分するか。」

少女を助ける（主に飯の為）ことを決めた俺の前に紙が現れた。紙の内容は、

???????????????? 冥王への緊急連絡

被告人、変態な大人（10人）罪状、集団での少女虐待
判決、極刑に処す

速やかに刑を執行し、少女の身の安全を確保されたし。尚、少女の身の安全を最優先とする事。達成出来なければ相応のペナルティあ

り。

????????????

………つて感じかな？

さて、冥界の王としての初仕事だ。

………何で冥王が最前線に立つんだろ？

side out

~~~~~

少女？side

油断した……。私は10人の男たちに囲まれて追い詰められている。魔法の力を持たないただの一般人だが、今は状況が悪すぎた。

真祖の吸血鬼である私は日がのぼる間は身体能力が十歳の子供と変わらない。魔力も魔法使いとの戦いでほぼゼロ。だからこそ隠れて休んでいたのだがこうして見つかった以上もう助からないだろう……。…。

「さあ、町で火炙りにしてやる。さあ立て！！立たないとここで殺すぞ！！」

髪を掴まれ宙吊りになるが、私に抵抗する力は残ってはいない。でも、これで苦痛も終わるだろう……。

「チィ、もういい死ん「オマエがな。」！ガハッ！？」

え！？私を掴んでいた男が崩れ落ちた！？

「とりあえず命に別状はないな？」

白い髪の少年（十歳？）がすぐ側に立っていた。

side out

煉夜 side

うわ〜なにこの身体、予想より全然弱いんだけど。全力でライダーキックかました男は生きてるし。

「とりあえず命に別状はないな？」

「あ、ああ、大丈夫だ。」

俺の言葉に慌てて返事をする少女。生きているから最悪の状況じゃないが……。

「テメエ……ただじゃあ済まさねえぞコラア！！」

状況は悪い。素人に毛が生えた位の身体能力だけで素人の俺が十人相手に勝てるわけねえ。

こんな時には……

「グッバイ！（\*^・^）b」

方針が決まれば行動あるのみ！！少女を背負ったら全力ダッシュ？

「ちよつ、いきなり逃g「違う、戦略的撤退だ。」……………」

少女の言葉を訂正しつつ走る俺の前に男が三人ほど立ちはだかる。がマトモにやり合う暇はない。

ジェットなんたらを破ったガ ダムのようにジャンプして男の頭に着地、

「ゴキユー！！」

と音を立てた後にそのばで再びジャンプする。

啞然とする男たちを5メートル後ろに残して着地、あとはただひた

すら走り通して振り切った。

………なかなかカッコよく少女を助け出した俺だが、九人も生き残っていたことでペナルティが発生した。

この後あの狼の群れに見つかってしまい、そのまま五時間に及ぶマラソンの末になんとか振り切って鍾乳洞の中に逃げ込む。

二人ともグロッキーな状態だったのでそのまま眠りについた。

………理不尽………だ………(T・T)

????????????????業務報告

成果 人間1人 男 三十代

死因 踏み台にして首を折 った

注記 少女に集団で暴行を 加えていたので更正  
プログラムを施行さ れたし。

追伸

戦闘能力などの詳細なステータスについて説明求む。  
????????????????

二話 ナニコレ？俺の幸運はどつなつてんだよ？（後書き）

幸運はC、いたって普通だが、固有スキルが日常的な不幸やっかいごとを呼び寄せる……そんな設定になります。

### 三話 エラそうにしてる奴は笑い者にしたくなる。

煉夜 side

俺が目を覚ました時には  
外は暗くなったようだ。

身体を動かそうとしても力が入らない。空腹と二連チャンの長時間  
マラソンが響いているのだろうが、少女の体調も気になるので上半  
身だけでも起こした。

少女は俺の隣で猫のように丸まって寝ていた。その可愛さに見とれ  
てしまうが、いつまでも呆ける訳にもいかない。肩を揺らして起こ  
そうと触れた瞬間、

「…………ツ!？」

少女が目を覚ますと驚いたらしく、身体を横にしたまま蹴りを俺の  
腹に決めた。

「オデユバツ!？」

少女の身体とは思えない威力の蹴りに壁に叩きつけられた。

少女は叩きつけられた俺を見てようやく正気に戻り、自分のしたこ



とを悟り顔が青ざめていた。

「だ、大丈夫だから………とりあえず自己紹介でもしようか？」

空腹＋長時間の運動で体力は限界を迎えていた所で凄まじい蹴りにより、残りライフは心身共に0に近い。

今の俺に彼女をどうこうするどころか歩く力も残ってはいない。彼女に協力してもらってエネルギー（食い物）を確保しないと死んでしまいそうだ。

「俺の名前は………ウィルフレド、気軽にウィルとでも呼んでくれ。」

メモに書いてあった警告は守っておく。

しかし少女は沈黙を守っている。こちらを警戒しているように見えた。

………ま、まさか変態か何かと思われる？マズイ、それはマズイ。なんとか彼女に協力してもらわないと、デットエンドだぞ？。

「………あーウン、言いたくなければ言わなくていいから話を聞いてくれ。」

「……………」

「（よかつた）とりあえずは聞いてくれるか）こんなところに連れてきてなんだが、今の俺は餓死の三……イヤ二歩手前でさ、歩く力もないんだけど何か食い物をくれないか？」

「……………（ジー）。」

「（視線が痛てえ？）こ、こう言っちゃ何だけど男達から助け出したらギブアンドテイクってことでどうにかならないか？」

「……………（ジーーーー）。」

「や、止めて！？俺のライフはもうゼロだよ！？……………俺はまだ死にたくねえよ……………」  
視線の圧力に耐え切れずに弱音がもれる。消したはずのアノ頃の記憶が脳裏をよぎり、俺から余裕や冷静さを吹き飛ばした。

……………俺は心に思っていることをそのまま口にすることにした。

「俺はまだ、こんなところでは死にたくない、まだ死ねない。そのためならなんでもする。だから、助けて欲しい。」

「……………」

俺の言葉に多少驚いていたが、すぐに真剣な顔でこちらを見ている。俺も彼女の返答を待つ。

「……………いいだろう。だが、私からも条件をださせてもらおう。」

考えがまとまったようだ。だが、その表情から柔らかさが消え失せ、氷のような空気が辺りを支配する。

……………多少だが殺気も混じっているようだ

「改めて自己紹介を。私の名はエヴァンジェリン・A・K・マクダウェル。吸血鬼の真祖、ハイ・デイルイトウォーカーだ。」

「ダウト（嘘）」

「即答！？そ、その理由はなんだ！？」

「まず見た目が幼女だし、日の光浴びてたし、人間に捕まってたし、あ、あとやっぱり幼女だし？」

「幼女って言うな！！しかも二回も言うなんて……………大体幼女だからって吸血鬼じゃない理由になるかー！！」

「そっちも二回言ったぞ。なに？気にしてんの？」

「そ、そんなこと…「幼女。」「キサマー!!!!!!」」

「ま、それはともかく「お前が原因だろうが!?!」詳しい説明よろしく。」

さすがにこれ以上からかうと見捨てられそうなので矛先を変えた。

「まったくこれだからこの体はイヤなんだ……まあいい一気に答えるぞ?。」

このあと真祖のことについての説明会になった。感想は『なんかご都合主義な吸血鬼(笑)』だな。型月のア クさんと比べたらさ……

「で、その真祖の吸血鬼(笑)さんの言う条件って何?。」

「(なんかムカつく?) まあ単純な話だが、私の従者になってもらうことだ。ついでに血をもらうぞ?。」

「吸血鬼になれって事か?。」

「そんなところだ。裏切られたら困るしな。」

「ま、助かるならいいか。その話乗った。」

「なんか軽過ぎないか？」

「今の最優先事項は『まだ死なない』ことだから、他のことはあまり気にならない。それに俺は冥王らしいから多分大丈夫さ。」

「頭は大丈夫か？」

「……………言いたいことは良くわかるが、それなら君だって自称吸血鬼じゃん。そんなことよりさ、なんか食い物を持ってきてよ……………」

このあと『魔力が足りんから血を寄越せ』と、エヴァンジェリンに吸血されたので貧血を起こし、彼女が帰ってくるまで寝ることにした。

side out

エヴァ side

いま私は食料を求めて空を飛んでいる。だが、頭を占めるのは《アイツは一体何者だ？》ということだ。

確かに助けてもらったことには多少は感謝している。それも含めて怪しいところが多い。

簡単にまとめると、

1 【身体能力】

2 【子供とは思えない頭】 3 【人間とは異なる血液】  
…といった所だ。

魔力がない奴の血で魔力などがかなり回復したことから、人外の血を引いているのだろう。

2と3の化け物要素から考えると奴も怪物だろうが、あの程度じゃ私には遠く及ばない。が、拾ったのも何かの縁、ちゃんと育て上げれば前衛ぐらいは務まるかもしれない。

空中で思考に耽っていると狼の遠吠えが聞こえてくる。

先ほど追いかけて回された（私は背負われていたが）のを思い出しここから離れる事にした。

「ウィルフレドに死なれない内に届けてやるか。」

仮にも命の恩人に目の前で死なれては目覚めが悪い。さっさと帰るとしよう。

「しかしチャチャゼロは何処にいるんだ？」

確か茂みに隠れて休んでいた時は見張りを任せていた筈だ。

チャチャゼロは強い。あの男たちに負ける事はまずないし、残骸すらなかった。何かよほどの事がないと無断で離れる事はしない。

あれでも私の従者なので、魔力を通じて生きているのはわかるが、逆にそれしか判らない。

「ウィルフレドに聞いてみるか……」

うん、私もお腹が減ったし奴にご飯を作らせるか。さっさと帰ろう。

side out

~~~~~

ウィル（煉夜） side

「ぶは〜生き返った。」

久しぶりの飯にありついた俺の心の叫びだ。

「……オマ……エよく……あん……なもの食え……た……な……（ガクツ）」

ちなみに俺は料理をしたことはない。しかも腹ペコなので速さ優先、洗った具材を適当に切って一緒に煮込んだ。闇鍋ってやつだ。

おいがきつかったが俺が食った分はなんともなかったんだが、エヴァンジェリンはハズレを引いたらしく一口でダウンしている。

「真祖の吸血鬼が情けない。毒は入れてないぞ？」

「この破壊…（ウツ）…力と持…続性は…魔法使いの毒薬をはるかに超…グフツ！？」

悲しくなってきた。自分の料理を食した人は死にかかっているんだ。俺の味覚が信じられなくなってきた。

「口直している？」

ガブツ

右手をエヴァに差し出すと無言で噛み付いてきた。その気迫からヤバさがよくわかる。吸血も激しい。

「え？ちよい吸血激しすぎない？もしかして死にそうなの？冗談でしょ？」

「フガフガガガガ！！」

フガフガガフガフガフガフガフガフガフガフガフガ！？」

訳 「冗談なものかー！！細胞が再生したそばから死滅していくぞ！？」

ハハツそんな大げさな。

俺が泣きながら血吸しているエヴァを笑っている後ろから『ジユウ』という音がしたので振り向くと件の闇鍋が容器を溶かして流れ出ていた……………。

こんなの食った俺とエヴァンジェリンは助かるのだろうか……………

四話 あれから一年、今日も平和に暮らしています。〈戦闘訓練編〉（前書き）

主人公が壊れます。

四話 あれから一年、今日も平和に暮らしてます。〈戦闘訓練編〉

ウィルside

エヴァンジェリン毒殺未遂事件から一年がたった。

エヴァを助けたことで俺も賞金首になり、今はエヴァと共に行動している。

ちなみにあの時はエヴァが俺を殺す勢いで吸血することで一命をとりとめた。

エヴァ曰く

「貴様は魔力はないが、その血には吸血鬼、人間を問わず超回復させる力があり、同じ毒物を摂取したことで血清にもなっていた。」

……との事。

冥界に問いただしたところ『致命傷を負うと完全回復する《ファールブルルの心臓》を埋め込んだ。』らしく、龍殺しの武器で心臓を貫く、自ら心臓を取り出す、生きる気力をなくさない限り、死なないとか。他にも

チャチャゼロ発見（狼を追い払おうとして、逆に捕まりオモチャにされていた）

エヴァの血が俺の血に負けたので吸血鬼化の失敗。

エヴァを襲撃する奴らの掃除と処分（冥界送り）。

狼との現・鬼ごっこ百回

……つてことがあった。

最近の主な日課はチャチャゼロとの戦闘訓練とエヴァによる座学、食料の調達と賞金稼ぎの迎撃となる。

で、今はチャチャゼロとの戦闘訓練なんだが……

「はあ。」

冥界から夢で『もっと死者を作って送れ』と催促されるので寝不足、今や心を癒せる時間はエヴァの寝顔が見れる見張りだけだ。

起きているエヴァが可愛く無いわけじゃない、ただ寝不足で不機嫌な俺と些細な事でよく喧嘩になるんだ。

血のおかげで体力に問題がないので、戦闘に問題はない。が、精神までは回復しないので悪循環となっている。

「オイオイタメ息ト八余裕ダナウィル、ケドウゴキニキレガネエゼ。」

「俺の目のクマみえてるだろ？襲撃が恐くてぐっすり寝れねえんだよ。」

チャチャゼロが俺を心配していることは知っている。

キレがない俺の動きに合わせて手加減しなければ俺はとっくに血の海に沈んでいるだろう。

「そんで、ぐっすり寝るには強くなる必要があるんだよ。訓練するしかない。」

ちなみに冥界のことは言っていない。エヴァも信じなかったのに説明するのが面倒くさかったし。

「ソリヤワカルケドヨ、イマノママジャツブレルゼ？」

「ストレスで死ねれば、苦労しないさ。」

「マ、ソウダヨナ……オレハテンションアゲルゼ？《解体》シテヤルヨ。」

「ゲッ！？ちょ、はやっ」

森の中で戦っているの、こちらの武器ロングソードは樹が邪魔して横薙ぎが制限されるので、突きと降り下ろしが基本攻撃になる。

森の環境に慣れるための模擬戦だが、チャチャゼロが少し本気を出すようだ。

樹を利用した縦横無尽の高速移動による斬殺ショー《解体》。最近の訓練はこれがラストに必ずくる。俺が何秒耐えたかで実力を測りつつ、チャチャゼロのストレス発散の時間となっているので、しばらく続けるそうだ。………主に後者の理由が大きいだろうが。

「チッ、ウオオオオ！」

「ソラソラ！マダハジマツタバカリダゼ？」

避けて、弾いて、受け流し、突いて、薙いで、降り下ろす。

前後左右と天地のほぼ全方位から襲われるので守勢だけでは凌げない。少ない隙を突いて攻勢に回る。攻守が目まぐるしく変わっていく。しかしそれも…

カアアアアン！！

長続きはせず、武器を弾き飛ばされてしまい……

「サア、コレデズツトオレノ攻勢^{ターン}ダナ！！」

「なんでそのネタを知ってい」『ザシユ！！』『グアツ！？』

「ソラソラ！止マツテルヒマナンテアタエナイゼ。」

ズガガガガガッ！！

「ぎ、ギブア「サセルモンカヨ！」ウアアー！？」

この後全身をズタズタにされ、完全回復したところを綺麗に『十七分割』されてしまった。

訂正……チャチャゼロは斬りごたえのある俺の心配^{サントバッグ}をしてただけだった……ようだ

side out

~~~~~

エヴァ side

「……………(ギロリ)」

「ス、スマネエゴ主人……楽スギテツイ？」

今いる場所の惨状に頭が痛くなる。

たくさん木が返り血に濡れている。地面はぐちゃぐちゃ泥沼状態、  
辺りに散らばるウィルフレドの欠片…

「つい？『つい楽しくて模擬戦で相手をバラバラにしていま  
した』……まさかそう言いたいのか？」

ものには限度つてもものがある。いくら不死の力があってもここまで  
されれば、私も死ぬ。……逆にここから蘇ってこれるウィルにも  
呆れるが。

だが罪には罰だ。

「そうかそうか……ここまでやってそれで済むなら……」

「ス、済ムナラ……?」

「『面白そうだからチャチャゼロを強化改造したい』っていうウィルフレドの提案……許可するか。」

「ヒイ!? マ、マツテクレゴ主人! ソレダケハ……ソレダケハゴ勘弁ヲ!?」

ああ、なるほどウィルは口喧嘩が強いわけだ。  
冷静さを奪えばあとは勝手に自滅していくからな。

「『模擬戦だからってやり過ぎるな』……何回注意したっけ?」

「ソ、ソレハ……」

「今回の十回目。……今まで何度これで危ない目にあってきた? 追い詰められてきた?」

これだけ血が流れば肉食動物が集まるし、さすがに魔法使いたちも気付く。

「『抜かぬ剣こそ最強と知れ』ウィルが言っていた言葉だが、素晴らしい格言だよこれは。私たちは賞金稼ぎと戦っても何の得にもならないんだ、戦いは避けるのが一番いい。」



魔力も体力も、気力にだって限りはある。それに……人殺しなど誰が好んでするものか……

「身を守る為の訓練で危険を呼び込んだら意味無いだろ！……何度  
も注意してこれなんだから改造ついでにリミッター付けるしかない  
よな？（黒笑）」

「ソ、ソシナ……（ムクツ）ウ、ウィル？モウナオツタノカ！？」

「いいのかエヴァ？本当にチャチャゼロ改造していいんだな！？」

「……まずは設計図を書いてからだ（目の輝きがハンパないだが  
……コイツはマッドだな。ナニソレ？怖い）。」

「クツクツクツ、こんなこともあるつかと改造プランは6通りまで  
準備してある。設計図どころか今すぐ改造できるぞ！」

「ゴ主人ッ！コノマッドヲ止メテクレ！後生ダ、タノムム（――）  
」

「スマン、チャチャゼロ。こうなったら私にも止めるのは無理だ。  
……殺しても死なないしな……」

「ゴ主人ー！？」

「と、まあふざけるのはこの位にして、今はこの場を離れよう。エ  
ヴァの言う通り戦いなんでこっちが損するだけだ。」

「……そうだな、さっさと移動しよう。(なんだ、冗談か。ウィルも冷静だな。)」

「アア……サッキハヤリスギテゴメンナサイ。」

「気にするな、そうときまればさっさと移動するぞ。」

こうして今日1日の大半は移動するだけで終わってしまった。

その日の夜……

「ところでウィル、昼に言ってた改造プランって……」

「実はAからZまで用意してある。」

「ハアツ!? 26通りも？」

「これがその設計図だ。」

懐から取り出したのは二本の巻物。

「変形合体は基本だけどシンプルにフルアーマー化も棄てがたい。いや、ロマンあるドリルとレーザーも忘れてはいけないな……」  
「……………ダメだこりゃ。」

この後私はウィルを気絶させ記憶を消去、設計図を塵も残さず焼却

した後にウイルに『マッドは怖い。なりたくない。』という暗示を  
文字通り『叩き込んだ』。  
私は一人の人間をまっとうな道へ導いたのだ！

## 主人公の能力説明（前書き）

グダグダな本編のグダグダな主人公設定

## 主人公の能力説明

作者「どうも、作者の怪盗レトルト（以下レト）です。」

煉夜「作者とヘルのせいであつとうな人生を送り損ねた燈城煉夜だ」

レト「……やっぱり恨んでる？」

煉夜「気にするな、俺が不幸に遭いつつ仕返しするコンセプトなんだろう？ちゃんと、後書きで、仕k……O H A N A S H I し  
ていくから。」

レト「ゴメンなさいゴメンなさいゴメンなさいゴメンなさいゴメン  
「質問に答える（バキッ）。」「グハツ……あらすじは決まってるん  
だけどノリと気分が執筆の原動力だから？」

煉夜「四話のように俺が壊れたのか。」

レト「これ以上の空中崩壊を防ぐために設定を書きました。」

煉夜「いいんじゃないか。俺も自分のことを知っておきたい。」

レト「ステータスはF a t eを参考にしています。」

名前：燈城煉夜（今はウィルフレドと偽っている）

クラス：冥府の王（仮）

年齢：体は十歳、精神年齢　　は二十歳

身長：137cm

体重：38.5kg

髪型：白髪を肩ぐらいまで伸ばしてまとめている。

特徴：見た目はV.P【咎を背負うもの】のウィルフレドを幼くした感じ。服装も一緒にマントがお気に入り。魂が改造により人間ではなくなり不老化した。

性格：気分屋。真面目だがノリはよく、テンションまかせな行動が多い。でも何故か印象は暗い。

### 【ステータス】

筋力　D

魔力　-

耐久　E

幸運　C

敏捷　E

宝具　A+

### 【スキル】

反・ご都合主義 《D》

ご都合主義の反対、都合の悪いことがよく起きる超迷惑なスキル。幸運値に関係なくスキルランクに応じた敵のエンカウント率が大幅に上がる。まだDランクなので『通り魔に出会う』などの常識的な不幸に遭い続ける程度ですんでいる。

逃走の心得 《B》

戦闘から離脱する時のみ敏捷が2ランク上がり、同ランク以下の敵から必ず離脱できる。複数相手でも判定は一人づつとなる。ランクは持久力を示し、Bだと半日逃げ続けられる。

マッドサイエンティスト

《C E》

世間の常識や倫理観、他者の理解から外れた科学技術の研究開発スキル。

武器や機械の開発、操作、修理に対する適性が付くが、ランクが上がるほど周りを気にしなくなる。

彼らの修理や治療は改造と読む。関わるなケン！

エヴァの精神治療により抑えられランクダウン（更正）している。

【宝具】

ファーブニルの心臓

《EX A+》

ヘルが勝手に埋め込んだ《とっておき》の宝具（竜の心臓）

死ぬとその場で完全復活する不死の呪い。

毒物には耐性ができるが、それでも煉夜との相性が悪い為に全ての力を発揮できていない。

煉夜が死ぬ方法はA以上の竜殺しの武器での心臓破壊、本人の生きる意思の放棄などがある。

煉夜「何だこの中途半端なチートは？本当に強化したのか？スキルもひどいのばかりだし。俺は疫病神か！？」

レト「精神修行には苦痛、悲しみ、逆境等々マイナスな環境が一番！」

煉夜「本音は？」

レト「煉夜の精神崩壊の下地作り。一気に崩壊させると大抵ただの廃人になるだけだと思っし。」

煉夜「……………」

レト「原作キャラにそこまでひどいことはしたくないもん。これからも頑張って生きてくれ。」

煉夜「俺が…何をした…普通に生きたい……………」



レト「それ無理だから。ほら、未来の嫁さんのヘルことロザリーがゲストとしてきてるぞ。……………オイ、戻ってこいよ。」

？「冥界の女王ヘルことロザリー（以下ロザ）じゃ。……………おい煉夜、なぜ妾に挨拶せぬのじゃ？無礼であるう！」

煉夜「ブツブツ（エヴァに来て欲しかった）……………」

ロザ「なに！？妾はハーレムなど許さん！！喰らえ、奥義《一夫妻去勢拳》！！」

煉夜「おぶばッ！？」

レト「……………グダグダになってきたのでここらでお開きといきましよう。」

ロザ「『千の雷』！！」

ズガガガガ……………

煉夜「アギャー！？」

レト「不定期の更新となりますが、これからも楽しく読んでいただければ幸いです。それでは……………おさらばです。」

五話 あれから一年、今日も平和に暮らしています。〈エヴァの座学編〉(前書き

エヴァ、キャラ崩壊……

やってしまった……

更新がひじょーに遅れてすみませんでしたーm(ー)m

五話 あれから一年、今日も平和に暮らしています。〈エヴァの座学編〉

エヴァ side

「……よって杖がなくても契約した指輪などの代用品で魔法を行使できる」

「杖を折っても魔法使いは戦える、か……そりゃ殺しとかなないと危険だよな」

《チャチャゼロの惨劇》から五日たった。あれほど派手にやらかした以上はその日の内に移動を開始したが、狼や賞金稼ぎ、私を狙う魔法使いどもに見つからなかったのは幸いだろう。

今日まで追跡はなく体力にも限界があるので今日は洞窟に隠れて座学で暇潰しだ。まあ座学と言っても雑談がほとんどのお茶会みたいなものだ。

チャチャゼロはマッドなウィルが恐ろしいのか訓練はしばらくやらないみたいだな。それを聞いたウィルが泣いて喜んでいたくらいだし自業自得さ。

「わかってるだろうが戦場の油断は死を招くだけだ。……オマエにはその理屈は当てはまらないがな」

「俺は死ななくても動けなくはなるし、そうなると俺が守るエヴァ

やチャチャゼロにだって危険が及ぶんだ。油断はできないね」

…ッ！？

こ、こついつ台詞をごく普通に言ってくるから困るんだッ！

「フンッ！私より年下のくせにませたガキだ。……そういうセリフは私より強くなってから言っただな」

「……後者はごもつともだけどき、お互いに年齢知ら無いじゃん……」

「そうだったか？仕方がないな、私はこんななりでも17歳になるんだぞ」

私がどうだと胸を張って歳を教えると何故か笑っているウィル。何か可笑しいことだったか私は？

「俺も二十歳なんだが？」

「嘘だ！！二十歳でそんな身体などあり得………無くもないか」

「そうだよ吸血鬼。俺の場合はこの心臓が原因だろうけどな」

「だろうな。その蘇生システムがどういう仕組みなのかは未だにわからないが、制限がない分吸血鬼の私には羨ましいよ」

「治療力は人間と変わらないから戦闘時は死なないと傷が治せないけどな……………どっちにしろもう身体が成長することはないんだ。

……………お互いにな……………」

「……………そうだな……………」

ウィルに出会う前は《これからずっとこの幼女の体型》だと思う度に絶望していたものだ。チャチャゼロ作成の理由には孤独に耐えられなかったのもある。

同じ境遇のウィルがいるが、二人とも憂鬱になるだけですんでいるんだ。現在進行形で……………

……………

……………

……………

イカンイカン、いつまでもこうしてるわけにも行かないな。

「なあウィル、そろそろ夕食にしないか？」

「……………ツハ！？そ、そうだな。俺も腹減ってきたし賛成だ」

「水汲み任せた」

「任された」

ウィルの仕事に調理は入っていない。お互いに《闇鍋》の二の舞は避ける為に食材調達はウィル、調理は私が担当だ。今回は貯蓄した

食糧を使うが。

…なんか夫婦みたいだ／＼／＼………って、何考えてるんだ私はっ！？これがこつそり作っている れ薬の効果か………試しに100CCの水に試作品を一滴混ぜた物をさらに一滴だけ服用しただけなのに………こんな劇薬はウィルには使えないな、嚴重に封印しておく。

「んじゃ、行ってくるわ」

「ん？あ、ああ気を付けてな」

ウィルに反射的に返事をする。奴は水汲みに行ってしまった。

………出会ってもう一年になるのに奴は私を女としては見ていない気がする。だからこそ安心できるのだが、なんかくやし。

「……やはりこの体のせいか……」

奴は二十歳、男として魅力ある女性をほっとくことはないだろう。

町では綺麗な女性に声をかけていたし。

私に声を掛けないのは魅力を感じていないからだろうか………納得いかない。

「いかな、調理に集中せねば。今日こそウィルの奴に美味しいと言わせてやるために！」

ウィルの奴は料理はダメだが味にはうるさからな。我が全力をもつてして、ここに最高の料理を作ってみせる！『闇の福音』の名にかけて！！！！

この後、勢いに任せて食糧の貯蓄を殆ど使いきってしまいウィルに怒られてしまったのだが、料理を食べると「美味しい」と褒められた。

一年近くに及ぶ努力が報われた瞬間に思わず涙が流れたのはウィルには秘密だ。

side out

~~~~~

ウィルside

エヴァの夕食を堪能した俺たちは自由行動をとることにした。チャチャゼロは食糧の狩りを、エヴァと俺は引き続き魔法の勉強をすることになった。今回の勉強するのは……………

「リック・ラク ラ・ラック ライラック！氷の精霊 57頭 集い
来たりて敵を切り裂け 魔法の射手 連弾 氷の57矢！！」

「ウオオ!?」

エヴァvs俺の模擬戦だ。結局俺は魔法を使えなかったのでエヴァ相手の対魔法使い戦の経験をしたほうが効率的らしい。手加減をして初級レベルの魔法で戦ってるらしいが……

「ほらほら私を守るとかほざいてそのざまか？」

「いや無理だろこれh「ズガガガ」57本の追尾弾だぞオイツ「ズガガガガガ」加減しろよ！」

実は今日のエヴァは何故か模擬戦を嫌がっていた為、そこで「負けたら1日勝者に従う」というルールでOKしてもらった。いつもはちゃんと手加減をしてくれるエヴァなんだが……

「私が全力出せば三百本はだせるぞ！追加だ、新呪文を喰らうがいー！」

「ふざけんh「ズガガガガガガガガガガ……」クソツー！」

詠唱を止めたいが逆に残りの魔法の射手で足止めされてしまう。

「いくぞー！リク・ラク ラ・ラツク ライラツク！来れ氷精、大気に満ちよ。白夜の国の凍土と氷河を……凍る大地！」

「ッ！……不発か？」「ピキピキ」「ッ！下か！？」

「もう遅い！」

地面から出た氷柱を何とか回避するが足が凍りついて動きが止まる。

「ヤバッ！？」

「止めだ！闇の精霊100柱！！魔法の射手！！連弾・闇の100矢！！！」

「ち、ちよつとm「ズドドドドドドドドドド……」ウボアー——
——！！！」

俺はまた死んじまった。これの何処が手加減したって言うんだろね？

この後、エヴァは復活した俺とチャチャゼロに白い目で見られたのは言うまでもない。罰としてポーンナスの話は無しになった。なんとあのエヴァが頭を下げて謝ってきたんだが、罰の取り消しはチャチャゼロが認めなかった。エヴァ自身がやり過ぎたチャチャゼロに罰を与えてきたので反論できないらしい。

……人形の性格は製作者譲りのようだ……

~~~~~  
座学その2（翌日の朝）

しばらくは座学（エヴァとの模擬戦）も取り止めになった。エヴァが若干涙目になってたような気がするが前例がある以上は仕方ない。エヴァはのことは好きだがマゾじゃないぞ……………多分な。

そんなこんなで俺とチャチャゼロで食糧集めに行こうとしたらエヴァが来た。

「おいウィル、魔法薬の勉強をしてみないか？」

「……………今度は実験台になれと？」

「ウツ！？……………そ、そんなことするか！！も、もちろん作る方さ。ウィルだってちょっとは魔法を使ってみたいだろ？」

「まあそうだ「そうだろそうだろ！なら決定だな、ほら早速」ちょい待ち、まずは残り少ない食糧を確保しないと。このままだと夕食が抜きになるぞ？」

「グツ……………ならさっさと採ってこい。そのあとで必ずやるぞ。絶対だからな！」

「わかったわかった約束するよ。」

チャチャゼロはこのやり取り（本人曰くイチャつき）が原因で、機

嫌が悪くなつちまつた。こんなんで狩りうまくいくのかねえ……

side out

~~~~~

エヴァ side

ウィルフレドとチャチャゼロが見えなくなつてから10秒たった。

「ハア」

(まさかウィルが私の授業を後回しにするなんて…)

今までになかったことなのでショックは大きかった。

「これまではチャチャゼロの訓練より私の授業を選んできたあのウィルが……」

あのウィルがチャチャゼロとの狩りを優先したのだ！この！私との！授業より！殺戮人形を選んだとー！?!?!?

「……ハッ、まさか昨日のことで私のことが嫌いになったのか！？あり得る、て言うか不味いマズイよ、どうする私、このままじゃ捨てられちゃうよお……」

..... 仕方がない（黒い笑顔）「

こうなったら封印していた調査途中の 薬を使おう。幸い材料は揃っているんだ、急げば昼前までには完成するさ。そしてそれを昼食に混ぜれば.....クッククック、完璧な計画だな。

ウィルフレドよ、私を無下にした罪は重い。その一生をもって償って貰うぞ！

「クッククック、アーハッハッハッハ.....」

ウィルとの明るい未来を想像すると笑いが抑えられん。計画成就の為に、ひいては輝かしい未来の為に。早速 薬の準備をしなければな。

s i d e o u t

~~~~~

ウィル s i d e

当然というか狩りはうまくいかず、ノルマ分集め終わった時には日が沈んでいた。事が起こったのは獲物をまとめてエヴァの所に帰ろうとした時だった。

「アゝア、斬リゴタエノアルヤツ居ナクテ詰マラナカッタゼ」

「何か俺ばっかり動いてた気がするんだが……………」

「ヒデエナオイ、オレハズット警戒シテタンダゼ？…オツ、ウワサヲスレバ影ツテカ？…………（隠レルゾ）」

「（了解）」

チャチャゼロの指示に従い茂みに身を隠して様子を伺つと五人ほどの集団がやってきた。

そのまま聞き耳を立てていると「エヴァンジェリン」や「ウィルフレド」の名が聞こえてきたことからコイツらは賞金稼ぎだろう。

「（チツ、マズイナ……………オイ、ウィルハゴ主人ニコノコトヲ連絡シテコイ）」

「（なんで？念話で出来るじゃん）」

「（ソノ念話ガ繋がラネエンダヨ！……………オレモウ少シコイツラ見張ツテオクカラ先二行ツテロ）」

「（確かに不味いな……………でも気を付けるよ？）」

「（ハツ、オレラノ中デハ一番ヨワツチイウィルガ言ウ台詞ジャネエナ）」

そんなのわかってるっーのと、心の中でシッコミつつもエヴァの所へ急いだ。

結局、件のお姫様は眠ってただけだった。

木に寄りかかって眠るエヴァ、その頭が少し右肩に傾いており膝には読みかけの開いた本がのっていた。

とても可愛いその光景を残したかったが生憎この時代にカメラはない。

脳裏にその絵を焼き付けてから泣く泣くエヴァを起こしにかかった。

「エヴァー！起きてくれー！賞金稼ぎがきたぞ！」

「ZZZ……あと3分………寝かせて………ZZZ……」

「駄目だ、今すぐ起きてくれ。早く逃げないと見つかったまう」

「なら………ZZZ………10分経ったら………ZZZ………起こして………」

…ZZZZZZ」

「いやいやいや、さっきより増えてるよ!？」

この後も呼び掛けたり揺すったり叩いたりしたがエヴァは一向に目覚めない。

どうしたものか悩んでいるとエヴァの手に小さな小瓶が握られていることに気が付いた……………なんだか怪しい淡い黄色の液体が入っているものだ。

「……………」

これが例の《魔法薬》……………二、ニトログリセリン…じゃないよな？

ま、さすがに考え過ぎだな、本物ならとっくに爆発してるだろうし……………でもこんな怪しい薬は大抵ヤバい代物だったりするしな……………イヤな予感がするし……………エヴァには悪いがどうにかして処分しよう。

「そうと決まればクスリを……………ッ取れないな……………」

小瓶はエヴァが想像以上の力で握り締めていて取れない。よほど危険な物なのだろうか？夜だから吸血鬼の力が高く凄まじい握力だ。さて、どうするか……………

あつ、中身だけ捨てればいいのか。慎重に蓋を開けて「オイッ（ドカ

ツッ！！」グハッ！？

チャチャゼロのデストロイ攻撃！！頭パーツが破壊され機能停止！

そして蘇生した。この間のやり取りに0.3秒しかかかってない。

……蘇生無駄に早くなってきたな。

「チャチャゼロ！！いきなり何すんだよ！？」

「ソレハ、コツチノ台詞ダ！！テメエゴ主人ニナニ変ナクスリ飲マソウトシテヤガル！！言イ訳八聞イテヤルガ、事ト次第第二ヨツテハ才前ト言エド只デハ済マサネエゾ！！！！」

ヤベエ、チャチャゼロの奴本気だ？……あの業物の鉦は訓練はおろか実戦でも出さないのに……

「いや、待てチャチャゼロ。エヴァの持ってた怪しいクスリを処分しようとしただけだ……」

「アア！？ソナン信ジラ」ほら、この通り手から外せないからこのまま中身だけ捨てようと思ったのに邪魔されたんだよ、お前にな。」「……………チッ、勘違いカヨ。」「

フウ、誤解が解けてお仕置きフラグは回ら「ウ、ウーン」



お、エヴァが起きた。

「うるさいぞ〜…二人とも何をやっ……。コレだから私がついていないとムニヤムニヤ……。喉渴いた……」

アハハ……。元々エヴァが早く起きてればこんな騒ぎにはならな「ゴクゴク」

……。何だこの音？

「オイツ……。イマ音八例ノ薬品才前ガ飲ンダ音ダヨナ（笑顔）？」

なんで（笑顔）？アラ？イヤな予感が……

「いや、飲んでないよ？」

小瓶を見ると

エヴァが中身を飲んでいた……。小瓶の中の淡い黄色の液体を……

「ア……」

「フウ、一息ついた。…この水…ハッ（。・。）」

正気になったエヴァは飲んだ物に気付いたらしく顔が青くなり、暫くしてからぶっ倒れた。

「エヴァー!?!」

「ゴ主人ー!?!」

俺とチャチャゼロはエヴァの傍に行った。脈はあるが叩いても揺さぶっても意識は戻らない。

「オイツエヴァ起きろ!!死ぬんじゃネエー!!クソツ、アレ何の薬だったんだ!?!」

「ゴ主人!ゴ主人!!何ヲ飲ンダ!!毒薬力!毒薬ジヤナイヨナ! ?頼ムカラ目ヲ開ケテクレゴ主人!!」

「だ、大丈夫だ、脈は安定してるから命には別状ないはずだ!………  
…多分」

「多分ツテナンダヨ多分ツテ!現ニゴ主人八目ヲ覚サネエゾ!?!」

「落ち着けて!!エヴァは毒薬なんて作らないし、誰を毒殺すんだよ。エヴァやお前、俺にはまず効かないし、俺達を追ってくる奴等にどう飲ますんだ?」

「ジャアナンデ飲ンダラ気絶シタツー！」

「知るか！俺だって詳しくないぞ！……即効性の睡眠薬かもな。」

「デモツ」俺の血も飲ましてるから恐らくは大丈夫だろう。「…モシモノ時ハ、覚悟シテオケヨ？」

勿論だ。俺のせいであんなに以上、もしもの時は心臓潰してでも助けるぞ。

このあと、エヴァの顔色が良くなってから俺が背負って移動を開始した。こんな状態で敵に遭遇する訳にはいかないからな。

~~~~~

更に翌日

「ウィル、好きだー！」

今は誰も住んでいないボロ屋敷にいる。あれからエヴァを背負って走り続けてここにたどり着いた。途中で賞金稼ぎに遭遇することはなく、この屋敷での休憩中にエヴァも無事に目覚めたのは幸運だ。

……いや、訂正しよう。エヴァは無事じゃない……主に精神的に。

この屋敷に来てすぐにエヴァの本を調べると誤って飲んだ液体は《惚れ薬》だと判明した。服用すると一瞬で気を失い初めに見た生き物を好きになるらしい。

チャチャゼロと相談して解毒剤ができるまでエヴァを部屋に隔離しようとしたんだが……運び終わった所でお姫様が起きちゃった。

「ウ、ウーン。よく寝た……ここはどこだ？」

「（マズイ、見られる前に外に）」

「ん、おいウィルそこでなに……て……る……」

「（あーヤベえな、見付かっちゃったよ……？）」

「ウィル、大好きだー！」

てなわけだ。なんか性格まで変わってるんですけど……真祖に効くような劇薬なんて誰につかうんだろ？俺か？俺なのか！？……今度からエヴァには優しくしよう……

それにしてもチャチャゼロまたキレルだろうな……？

そして見張りから戻ったチャチャゼロにこの次第を伝えてみた……

……

「イインジャネエノ永遠ノ《ロリ》ト《シヨタ》ナンダシオ似合イ

ノカップル誕生ダ俺モゴ主人ニイ夫ガ出来テウレシイゼコレカラハ旦那トデモ呼バセテモラウヨ改メテヨロシクナ旦那（棒読み）」

……………恐ろしい。

皮肉混じりのセリフを息継ぎ無し（人形だけど）の棒読みで言い切ったよ。……………口パクで、

『ゴ主人ニ、変ナコトシタラバラバラニ解体シテ土ニ埋メテヤルカラナ？』

と、言っていた…殺せないから生き埋めにつてか？

……………俺は悪くないのに……………

しかも、

「夫／＼／＼／……………うん、流石だねチャチャゼロ。ウィルをよくわかってる。ハツなら私はお嫁さん／＼／……………それでこそ私が作った従者だよ。……………子どもは二人欲しいな／＼／」

そんなチャチャゼロを怖がるどころか笑顔で褒めつつ妄想にふける壊れたエヴァ。

こんなのエヴァじゃねえ。俺が愛でるエヴァはもつとこう……………ツンデレ？なんだ。いつもは強がってるのにたまに見る可愛い一面とのギャップが素晴らしいんだ。自分の願望をべらべら喋るような軽い事はするとは思えない。第一ロリータにまで手を出すほど俺は病んじやいない。転生してから同年代の女性に声をかけている……………子供扱いされて今ん所全敗だけどな……………

……………現実に向き直ろう、早くエヴァを元に戻す為に。

チャチャゼロはエヴァの口から妄想が洩れるたびに圧力が増していく。エヴァは気にせず俺のバットエンドフラグを強化していく。

…… B エンド達成率53%、なおも上昇中……

ヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイ…… 落ち着け落ち着くんだ俺、こんな所で終わってたまるか。とりあえずエヴァを止めよう。

「なあエヴァ、落ち着いてくれ。まだ結婚してないし夫は変だろ？」

「そう！そうだよ！！まだ憧れの結婚式を挙げてないじゃん！！じゃあ急いで式の準備しないとね。」

「……ハイ？」

「だから結婚式だよ結婚式！夫婦になる儀式みたいなものなんだけども知らないの？」

「いや知ってるけどなんでいきなり結婚式になるのさ！？」

「知っているなら問題なし！早く準備しようよ！」

「待った！ストップ！ちょっと待て！今はそんなことより「そんなこと！?!?!」エヴァ？」

「そんなこと……ウィルの中では私との結婚式はそんなこと扱い……駄目だ鬱だもう生きていけない……ブツブツ……」

「……………」

場の空気が一触即発から陰鬱なモノに変わっちまった。エヴァは部屋の隅でよく聞こえないがなにか呟いてる……内容を聞いたら……いや、聞きたくない。戻れない気がする……

「（オイ、アレハ言イ過ギジャネエカ？）」

「（ごく当たり前の反応だろ！？賞金稼ぎがうるつくこの状況で結婚式なんて頭おかしいって！………。どんだけ強力な薬ならあそこまで変わんのさ？）」

「（ゴ主人ノ魔力ガコモツタ薬ダカラナ。強力ナノハ当然ダ。ソレヨリアンナ状態ジャゴ主人自殺シソウナンダガ？ナントカシロヨ）」

「（それを俺にふるか！？………けど励ますときつと結婚式の準備を始めるぞ。それでお前に埋められたくないんだけど……）」

「（ゴ主人ノ命ニハ変エラレネエサ。ソレニ解毒剤サエ飲マセバ大丈夫ダロ）」

「（その解毒剤の精製具合はどうなのさ？）」

「（後三時間ツテ所ダナ。イタツテ順調、ナンノ問題モナイゼ）」

「（結局効かなくて壊れたエヴァと結婚なんて俺はイヤだぞ？相手くらい俺だって選びたい）」

「(ソノ子供ノナリデヨク《ナンパ》スルヨナ？イツモ失敗スルクセニ……)」

「(うるせえ、俺だつて彼女欲しいんだよ。)」

「(オマエハ賞金首ダカラゴ主人クライシカ相手イナイゼ？)」

「(チャチャゼロ…お前俺とエヴァを離したいんじゃないの？)」

「(ソレハ勘違いダナ。サツキノ脅迫ハ今ノゴ主人ノ状態ヲ利用サセナイ為ニ釘ヲサシタダケダ。ゴ主人ガマトモナラ人ノ恋路ノ邪魔ナンカシネエヨ、メンドクセエ。)」

あのチャチャゼロから主人思いな一面が！？主人に生意気な人斬り大好き人形っただけじゃないみたいだ。少し見直した。

「(大体ゴ主人ガアレジャ余計ニウィルト訓練シニククナルジャネエカ。カスリ傷一ツデナニ言ワレルカワカッタモンジャネエ。アア、気兼ね無クバラセタ昔ガ懐カシイゼ……)」

前言撤回、やっぱコイツは殺戮人形だ。なんかエヴァをこのままにしておきたくなってきたと思つた俺は悪くないはず。

気付くと部屋の空気がさつきより三倍は重い。

ふと、エヴァを見ると

「ウフフ……さつきからチャチャゼロとばかり内緒話しちゃって…

……………現世が騒がしくて結婚できないなら……………死のう……………
ウィルと一緒に……………死んであの世で添い遂げよう……………
……………アハハハハハハハハ……………」

ヤンデレの末期の症状だろこれ……………もうやだ、近づきたくない。
けど後ろには刃物を持ったチャチャゼロが立ち塞がる。「サツサト
治せ」と言ってる……………逃げ場ナシかよ……………

あああああ！……！自棄だ、もうどうにでもなれ！！

ガシッ！！

「……！ウ、ウィル？き、急に抱きしめるなんてど、どうしたの！
？」

さすがに今のエヴァでも驚いたらしい。が、更に強く抱きしめて耳
元で囁く。

「エヴァ……………御免な、冷たくあたったりして。俺はエヴァを敵から
守りたかったんだ。……………エヴァ、俺は君が好きだ」

「……………／／／／（ボンッ）」

俺の告白の言葉でエヴァは顔が真っ赤になった。魔力が軽く暴走し、
衝撃波でチャチャゼロは吹っ飛んで壁を貫通していった。部屋二つ

はぶち抜いただろう。
ハハハ、ざまあないぜ。

「ウィル……！」

エヴァも俺を抱きしめてきた……落ち着け俺、正気と目的を見失うな。あくまでエヴァを自殺させないための措置だ。

正気じゃない相手の意志を利用するなどヘドが出る。この問題が解決したら改めて「ギリギリ……ミシッ……痛い痛い痛い！エヴァ苦し……！力強すぎ加減してくれ！ギブ！ギブアップ！……あれっ？……俺声出てないよ」「ウィル……私は嬉しいよ」「俺苦しいよ……気付いてくれ！」

タツプタツプ

「ん、ウィルどうし……キヤアアー！？ウィル！？顔が青いよどうしたの！？お願い死なないで……！」

殺人ハグから解放された後に、前に後ろにシェイクされる……吸
血鬼の力は凄まじいな。しかも死んでないから顔色は戻らないし、
揺さぶりで俺はグロッキー状態。ハハハ、いつまで続くのかなこの
拷問は……

ブチッ！ガン！ブシュー！

その先のことはよく覚えていない。

チャチャゼロから聞いた話によるとこの後にエヴァが掴んでいた襟が破れて頭が床に叩きつけられたらしい。意識を失い大量に出血したが死亡していなかった為に回復（復活）せず、それを見たエヴァは俺が死んだと思い込み発狂、後追い自殺を間一髪でチャチャゼロが防いだとか。

憔悴したチャチャゼロの話を気の毒に思いつつ聞いていると恐ろしい事が告げられた。

「解毒剤ガダメニナッタ」

「……………ハイ？」

「二度モ言ワネエゾ。事実ダシナ」

「……………ナンデ？」

「原因ハオマエダウイル。直接的ニハゴ主人ガ破壊シタガナ」

「……………ドウシテ？」

「アノ熱イ告白デ起キタ魔力ノ暴走、オレサマガブツ飛ンダ衝撃波デナ。」

……もう疲れた、寝よう。ロザリーの小言の方が何倍もましだ。現実逃避が不眠症に効くとはね。

明日を生きるためにも今だけはイヤな現実など忘れて眠るとしよう。

六話 ヤンデレエヴァ最強伝説 〈前編〉 (前書き)

はっちゃけました。

1・エヴァが治ってません。 むしろ悪化。

2・主人公家出

3・型月から一名追加

こんな感じかな。

六話 ヤンデレエヴァ最強伝説 〈前編〉

チャチャゼロside

「ハア……………」

ヨウ……《マクダウエル一家》ノチャチャゼロトウィルダ……

ア？上ノ新シイ名詞八何カツテ？ゴ主人ガ付ケタオレ達三人ノニツ名ダトヨ……

ゴ主人ガ自作ノ惚レ薬デウィルニ対シテヤンデレ化シチマッタノハ知ツテンダロ？……………アノ後ゴ主人ガ

『絶対に教会で結婚式を挙げるんだ！』

ト駄々コネテナ。オレサマトウィルノ説得デ何トカ我慢シテモラウ代ワリニウィルノ姓ヲ《マクダウエル》ニスルコトデ話ガツイタワケダ。

「アー疲レタ。コノ語りハオレニモ読者ニモ、ツイデニ作者ニモ優シクナイカラナ詳シクハウィルカラ聞イテクレ」

「？どうしたチャチャゼロ、急に变なこと言つて。ま、まさかエヴァが起きたのか！？……………アハハ、冥界でロザリーが手を振ってるのが見える……………」

可哀想ニ。ココマデビビルトハナ……コイツハトラウマニナルゼ。

ウイルハコノ件デ一番ノ被害者ト言エルダロウ。ヤルコトナスコト空回ッテルカラナ。サスガノオレデモ同情スルゼ。

「大丈夫ダ、グツスリ寝テイル。ダカラ戻ッテコイ」

トハ言ッテモ頼ミノ解毒剤ガ消エタシナ。オレモ現実逃避スルカ。

賞金稼ギデモ来ネーカナ。溜マツタストレス発散シテヨ。

side out

~~~~~

ウイルside

チャチャゼロの奴も大分参ってるな……

まあ、無理も無い。あれは悪夢だ。生前はファンフィクションの中のヤンデレに少しは憧れたんだが……見ると聞くとじゃ大違いだった。

少しでも構ってやらないとすぐ『生きていけない』とか『この世の

終わり』等ネガティブ発言の嵐。

結婚式についても『教会で挙げるんだ！』とブツ壊れた事を言う始末。ご自分が吸血鬼だということをお忘れですか！？

さっきまでは結婚式は諦めてくれとチャチャゼロと共に説得しに行ってたんだが、エヴァがキレて『二人で死んであの世で一緒に』を実践しようとするし。

あれは壮絶な戦いだった。エヴァは攻撃魔法《闇の吹雪》を無詠唱で無理矢理連発してきた為に俺達は近付けず、俺が盾になりチャチャゼロが俺を（殺して）回復し、エヴァの魔力切れまでしのぐ他なかった。まったく《心臓》がなけりゃとつくにBAD ENDだな。魔法が止んで油断した俺がエヴァに近付くとナイフで刺された。しかもその状態からエヴァは吸血して魔力を補給し、エヴァの最上級殲滅魔法の詠唱を始めた。流星はヤンデレ、自殺すのに150フイート四方巻き込むとははた迷惑だね。仕方がないし俺は最後の力を振り絞って

「結婚式を賞金稼ぎに邪魔されたくない！俺はエヴァを危ない目には会わせたく無いんだ！」

などと、『彼女を守ろうとする男』を演じてエヴァを説得した。

代わりにマクダウエルの姓を名乗る事になった為に大して変わらな  
いんだが（無論、悪い意味で）……………



で、件のお姫様がやっと眠ったから俺等は心からの休憩をとれているわけだ。

以上、説明終わり！休憩に戻らせてもらおう。

「アゝお茶がうめえ」

普段は飲まない紅茶を自分でわざわざいれて飲んでる位だから大分参っている。……俺だってお茶ぐらいはまともなものを淹れられる。茶葉に熱湯注ぐだけで毒物にはならないさ。

「しかしこれからどうしたもんかね。解毒剤の材料はもうないし……」

俺から大量に吸血したのに解けないんじやお手上げだ。エヴァの魔力が込められた惚れ薬……魔法薬の解毒剤はエヴァにしか作れない。少なくとも精製前の材料にエヴァの魔力を注がないといけないのだ。そうだ。

「うん、どうしようもないね。ハハハハ……ハア」

何が哀しくて心身共に10歳のヤンデレとすごさにゃならんのか。しかも不老不死ときた。この地獄が永遠に続いていく……鬱だ。さつき殲滅魔法の詠唱邪魔しなけりゃ良かったかも。

「あーもー、ネガティブ思考はウンザリだ！ここは気晴らしに町にでも行くか」

腹も減ったし、何より病んでいないまともな人の言葉が聞きたい。

買い出し用の認識障害の術式が編み込まれたマント着てけばまず正体バレないしな。ちなみに時間制限付きで連続使用不可等の問題で常時使えないのが惜しい。まあ、それでも十分役に立つんだが。

「えーと、マントはよし、武器もよし、お金はないけど干し肉と毛皮を換金すればどうにかなるだろ」

書き置きもしたし準備万端。チャチャゼロよ、後の事は任せた。

……………グッドラック！

side out

~~~~~

Hヴア side

私はエヴァンジェリン・A・K・マクダウエル。こんなナリ（幼女姿）だけど真祖の吸血鬼、立派な17歳だからね？

今日は私にしては珍しく朝に目が覚めた。ああ、なんて気分がいいんだろう。普段は忌々しく思う朝の日射しでさえ私を祝福しているようだよ。

理由は勿論ある。

昨日、ウィルフレドがこれからは私と同じ《マクダウエル》の姓を名乗っていくことが決まったからだ！

これってもう家族になったも同じだよー！！

教会で結婚式を挙げられなかったのはほんつとーに辛いけど、賞金首の私たちじゃ式どころじゃなくなるもんね……何よりウィルが『エヴァを危ない目には会わせたく無いんだ！』って言うてくれたんだよ？それを聞いたら教会での結婚式もどうでも良くなっちゃった。私だつてウィルを危険に晒したくないしね。

よく考えたら吸血鬼の私が教会で神に誓いを立てるのはおかしいな（笑）。

あれ？そういえば私とウィルは誓いの言葉を交わしていない……つて事は結婚できてない！？

「うん、早くウィルにこの事を伝えて誓いを立てなくっちゃ。ウィルに悪い虫がつく前にね…」（ニッコリ）

さっそくウィルを見つけないとね……

〜 搜索開始

「ウィル〜ウィルフレド〜。何処にいろの〜？ちょっと話したいことがあるんだけどー！」

ウィルは見つからない。

〜 5分経過

「グズツ……………ウィル……………何処？……………意地悪は……………止めてよう…」

やっぱりウィルは見つからない。

〜 10分経過

「ウワァーーン！何処なのヴィルーーーーー！！私を置いてきぼりにしてまでなにかしたいのーーーーー！！いい加減出てきてよー！」

それでもウィルはry

〜 更に5分経過

「もうヤダ……………ウィルがいないんじゃ生きる意味ない……………てかそんな世界は消えてしまえ……………」

「クソッ！ウィルノ野郎オレニ押シツケテ逃ゲヤガッテ……………ゲ、ゴ

「チャチャゼロ……何で私は置いてかれたの？」

「例ノマントジャゴ主人ノ魔力ハ隠シキレナイカラダロ。(ウイルノ野郎：オレヲ置イテ逃ゲヤガッタナ)……………諦メヨウゼ」

「ふん、…エイツ！ほら、これなら行けるよね？」

私は心を無にして体から溢れ出る魔力を完璧に制御し、ゼロに見せた。これで魔法使いたちにもバレれる事はない。

「ゴ主人……イツノ間ニソソナ高等技術ヲ身ニ付ケタンダ？」

「買い出しと一緒に行きかけたから練習したんだ。感情をコントロール出来れば簡単だよ。」

「(ウイルニ会ツタラスグ解ケソウナンダガ……)」

「じゃ、準備ができしたい私は行くけどチャチャゼロはどうする？」

「オレハパスダ。オレガイタラドウシテモ怪シマレルシ、ウイルノ奴ト入チ違イニナツタラ困ルダロ？一人デ気楽ニ留守番シテルゼ」

「そっか…ありがとうチャチャゼロ。お留守番よろしくね。」

「アア、任せトケ。(ウイルノ奴：墓穴ヲ掘ツタナ。マ、オレガ楽ニナルシホツトクカ)」

「……よし、準備完了！それじゃ行ってきまーす」

今行くから待っててね、ウィル

side out

~~~~~

ウィルside

ゾクウウ！

「？どうしたボウズ。顔が青いぞ、大丈夫か？」

「だ、大丈夫だ。少し寒気を感じただけだからな。あと、俺はボウズじゃないって言ってるだろう……」

「ブツハハハ！お前みたいなガキはどう見てもボウズだろうが！まあ、体調には気い付けろよ？俺みたくおっきくなりたいならな。」

「ハイハイ、わかったからサツサと換金してくれ」

さっきの寒気は何だったんだろうな。ま、それはともかく今毛皮の換金が終わった所だ。

服屋の店主の声はうっさかったが中々の値段で買い取ってくれた。これならワインを三本は買える。

この町は規模は小さいが物流の宿場町になっている。いろんな店があるが、人も多く商人や傭兵、貴族まで休んでいき、教会まであるそう。例のマントを着てなきや賞金首だとすぐバレそう。エヴァを連れて来れるわけがない。

見つかる危険を犯して来ただけあってこの喧騒は俺の思考をすぐに正常に戻した。ここではネガティブ思考じゃ、カモになるだけだ。着いたそうそう干し肉スラれたしな。

「なあオヤジさん、最近の情勢はどうだい？」

「おいおい……ここは服屋だぜ？そうゆうのは酒場で聞くもんだろ。ほら、あそこの角をまがると安くて旨い酒を出す酒場があるぞ」

「サンキュー。何か世話になりっぱなしだな。」

「持ちつ持たれつさ。まあ、戦争が続いて品薄でな。毛皮とかの原料が喉から手が出るほど欲しかったってわけさ。確実にお前の二倍は儲かるな」

「ハハハ、流石は商人だな。十分詳しいじゃん……てか、利益のことをよく俺の前で言えたな」

「言う奴は選ぶさ。知ってるか？商売人なら人を見る目は必須科目なんだぜ？」

「あんたみたいな商人は初めてだがな。そろそろいくわ。それじゃあな」



「ああ、じゃあな。おつきくなったら娘の婿にしてやるからまたこいよ」

「……機会があったらよらせて貰うよ」

親切で強かな服屋と別れて酒場に向かう。世界情勢から美味しいパンやワインまで。情報集めは酒場、RPGの基本でしょ。

いざ、良い情報とお酒、あとご飯を求めて。酒場に入ってしまった。

（10分後）

「たつく、どいつもこいつも俺を子供扱いしやがって……俺、二十歳なのに」

解るだろ？ 追い出されたんだよ。ガキ扱いされて……水しか出なかつたし……いや、料理は出たが『大人専用だ』とかほざいた酔っぱらいに横から奪われた。ムカついたから奪われる直前に俺特製の《闇鍋エキスー%配合液》を入れといた。これで三日間はトイレから出られないだろう。

情報も最悪だ。こんな昼間から酒に溺れる奴等が世界情勢語る訳もなかった。聞く価値のない愚痴しか聞こえてこない

「酒場なんてもう二度と行かねえ」

さすがに罪悪感を感じたのかマスターが旨いパン屋を紹介してくれた。かなり美味いらしいので早速行ってみることにした。弁当代わりの干し肉を食べて無いので腹ペコだったからだ。

教わった道を歩いて十分、道中特に問題は無く、無事店にはついたが…

「スゲー行列……」

人気のある店なんだろう。三十人は並んでいた。店員の女性の誘導に従い最後列に並ぶ。蒼い長髪で俺好みの美人だ。………19歳位と見た。よし、早速…

「貴女に一目惚れしました。良ければ、俺と付き合ってください。」

「え？えーと……ボク、店が終わったら遊んであげるね。」

また子供扱いされた………まあ、また会う約束したしもうちよい粘るか。

そんなこんなで15分。行列は更に伸び、五十人に届いた。俺は前から14番目の位置まで進んでいる。

「いや〜ここまで人気なら味も期待出来そうだな。売り切れなきや

いいけど……ん？後ろが騒がしいな」

後ろを振り向くと最後列で一人の男が怒鳴っている。

「おいゴリアー！いつまで待たせる気だここの店はア！店主だ！さつさと店主を出せゴリアー！！」

怒鳴っているのは2・5メートルごえの大男。腹が出て上の服を着てないスキンヘッド野郎。中モブだな。

二回も『ゴリアー』って言ったな。いちやもんのお約束か？まあ、無視だ無視。今は腹ペコだし。何より目立つ訳にはいか「わ、私が店主です」……マジ？あの蒼髪の美人が？

「おうおうおう、美人の店主だからってこれはねえだろうがよう！オレ様は腹ペコなんだぞお、早く食いたいんだよお！さつさとコイツらどけやがレエー！！」

俺も空腹を我慢して並んでるんだがな……

「ほ、他の…お客さんに迷「ウルセエ！！お客様は神様だろうが！どうしてもイヤだってんなら責任取ってコイツらいなくなるまでオレ様の相手をしてもらおうか。」そ、そんな！」

あのゴミ何言っただ？その女性には俺という先約があるんだ。早く潰そ。

待ちの行列から抜けて騒ぎを見て助けもせずに下品な笑いを浮かべている野次馬たち（男）に紛れ込んだ。オエ、ヘドが出る。ついでだ、この下衆どもを巻き添えにしよう。

「別にいいだろうが減るもんじゃない」「減るに決まっただろ、猿。そんなこともわからないのかバカめ。」誰だ！オレ様を馬鹿にした奴は！！」

人混みの中からの罵倒の声に反応する猿（大男）、当然発言者の俺がいる方を向く。追加だ、火に爆薬を放り込むか。

「猿が悪口に反応するなんてな。人並みの頭脳があつたら常識ぐらい理解出来るだろあ悪いだからバカなんだよなそいつは失礼分かるように説明してやるから終わつたら感謝して地面に頭擦り付ける。」

一気に捲し立てたら周りが呆然としている。俺は身体の小ささを生かして移動しながら喋っているためばれてはいない。大男すら固まっている。小さな脳じゃ処理しきれないんだな。まだ続くんだけど。

「あの行列にはオマエより早く着いた腹ペコな人がいるわバカめ。待てないなら他の空いてる店に行ばいいだろう。そのぐらい普通なら考えつくはずだ。そんなオマエに敢えて言うぞ？《だからオマエ



で言うな大人しく悲鳴をあげるそして死ね」

顔を蹴りつけて黙らせ、《闇鍋エキス》を一滴だけうずくまる大男の顔の前で石畳に垂らす。

『ジユウウウウ』

異臭と共に石畳が溶けていく。大男の顔は真つ青だ

「おつといけない、石畳が溶けてしまった。次はちゃんと耳に入れなきゃな」

「ウワアアアアア!?!? 助けてくれえええええ!!」

泣きながら一目散に逃げて行く大男。はたから見れば泣かしたのは10歳頃の子供だから実にシュールな絵に見えるだろう。

「あ…ありがとう!怖かったよ」

「グエ!?!」

蒼髪のお姉…ゲフンゲフン、女性店主に後ろから抱きしめられた。……お姉さんなんて思ったら自分が子供と認めるようなものだ。……っていかチヨークスリーパーになってて苦しい……

タップタップ

「エ?どうし……キャア!」、「ごめんなさい!ついついもの癖で…  
…ボク大丈夫?」

「……ブハツ!だ、大丈夫大丈夫(死ぬかと思った?)。あと俺こ  
んなナリでも二十歳だからそこんとこヨロシク」

締め技が癖で出るなんて…き、きつと女性だから色々苦労してきた  
んだろっ……

「そ、そうですか……あの、大したお礼は出来ませんが「いいって  
いいって」「え?でも……」

「俺もパン買いに来ただけだしな。…なら今日のオススメを教えて  
よ」

「は、はい任せてく」店長「本日の分終了しました」エエッ!?そ、  
そんなぁ………」

「さすがは町一番人気のパン屋、売り切れも早いな。(御飯まだな  
んだがなぁ)」

「………あ!だ、だったら私の家に来ませんか?お昼御飯を「ご馳走  
できるし………それに……」

「え!?!いいのか?そこまでしてもらって………」

「ええ。こちらこそ危ない所を助けてもらったんですから。それく

らいさせてください。」

なんていい人だろう。ヤンデレエヴァとは大違いだ。

「それじゃあ御言葉に甘えて……そうだ！自己紹介がまだだった。俺の名はウィルフレド、気軽にウィルと呼んでくれ。」

「ウィルフレド……いいお名前ですね。私の名前はエレイシアと言います。どうぞよろしく願いますウィルフレドさん」

「いちいちこそ、お世話になるのでよろしく頼むよ」

この時は考えてなかったんだ……ヤンデレ化したエヴァの恐ろしさ………《闇の福音》《童姿の闇の魔王》とまで呼ばれていくエヴァが今は誇りと言つ縛りが無い。

その恐ろしさを………

この時から既に我が身はその魔王の目に捉えられていたことをこの時の俺は知るよしもない。



六話 ヤンテレエヴァ 最強伝説 へ前編へ (後書き)

カレーな代 者さんは平行世界の前世ってことで納得していただけないでしょうか。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1741o/>

---

冥王？ コレはパシリの間違いだろ？

2011年9月9日00時37分発行